



見えない敵から学んだこと

伊自良中学校3年 田中 乃愛

今日は小学校の卒業式。本当は在校生のみんなに晴れ舞台を見てほしかった。でも、それは叶わなかつた。「コロナ」という一つの生物兵器によつて。

二〇一九年十二月、世界のあり方を一変させた。ただなんとなく毎日を過ごしていたけれど、ある日、私はこんな言葉を耳にした。「コロナ。」たつた三文字の言葉。最初は誰もが大丈夫と思つただろう。しかし、学校が休校になり、緊急事態宣言が発令され、ほとんどの時間を家中で過ごすことになった。ああ、暇だな。今頃みんな何をしているのだろう。

休校なんてすぐに終わると思つていた。しかし、一週間、二週間と経ついくごとに、友達に会えない寂しさが募つていつた。しだいに、家で過ごすことにも飽きてきた。

数日後、少し大きめの制服に身を包み、初めて中学校に登校した。友達との久しぶりの再会。マスクごしの友達は表情が分かりにくく、声も聞き取りにくい。今となつては当たり前の光景だが、当時の私にとっては苦痛でしかなかつた。中学校最初の授業は動画での授業。ただでさえ、中学校という新しい環境での生活に不安を感じていたのに、友達をつくるきっかけは失われ、勉強についていくけるかの不安だけが膨らんでいった。今までだったら、学校に行くのめんどくさいな、行きたくないなど思つていた。しかし、

コロナによる休校を経験し、学校に行けることの素晴らしさを改めて知つた。

買い物に行けば、お店が閉まつていたり、スーパーのマスクや消毒液がない状態が続いたり、マスクを買うためだけに行列ができたりと、今までに体験したことのない日々の連続。何もかもが分からぬ状態のまま手探りで毎日を過ごして

いた。そんな中、私にとつてある悲劇が起きた。身近な人のコロナの感染。私は頭が真っ白になつた。怖くなつた。テレビで連日のように報道されていたが、頭の隅では、他人事のように感じていた。コロナが身近に迫つてきてる恐怖と家族や周りの大切な人がコロナにかかるのではないかという不安が大きくなつていつた。コロナが、私たちの生活を奪つていつた。

私に何かできることはないか。コロナの中でも、きっとあるはずだ。そこで私は、コロナ禍でも学校を良くしたいと考えた。そうだ、コロナだからといって、私たちの可能性を狭める必要はない。私たちの中学校生活を価値のあるものにするのは私たちだ。少しでも楽しく、充実させていきたい。そんな思いを胸に、私は生徒会長になつた。初めての大きな仕事は体育祭。コロナ禍でも最高の体育祭にしよう、全校で一から企画をし、準備をし、限りある時間の中で、精一杯練習をした。今回の体育祭は、小学校の子

を呼んで行う初めての試みだつた。小規模校だからこそできる、最高の体育祭となつた。

コロナウイルスが流行してから三年が経とうとしている。これまで当たり前だつた生活が当たり前ではなくなり、苦しかつた。戸惑つたり、物足りなさを感じりもした。それはきっと私だけではないだろう。

そんな状況下でも、私たちの生活は続く。私たちは私たちであり続けなければならぬ。これはとても難しいことだ。友達とおしゃべりすること、教室で授業を受けること、マスクなしで体育祭を楽しむこと……。そんな当たり前の日常は、決して当たり前ではない。そう気がついたのはコロナのおかげである。コロナが生まれてしまつた以上、私たちはコロナと共存していかなければならない。それはこの先ずっと続いていく。一日一日に感謝しながら、これから先も生活していく。コロナ禍でも、私は前を向いて生きていく。未来は自分で作つていくものだから。

明日はどんな一日になるのかな。

令和4年度 山県市少年の主張大会

市少年の主張大会で優秀賞に輝いた2人の生徒の作品を紹介します。



ケアラー問題を知る

高富中学校3年 村瀬 智香

介護福祉士の不足、虐待、老老介護。これらは全て日本が抱える介護問題だ。その多くは高齢化に起因し、注目を浴びている。一方で、あまり認知されていない問題もある。ケアラー問題だ。

世の中にはケアラーという人達がある。その定義は、高齢や障害、疾病等により援助が必要な親族等に対し、無償で介護や看護をしている人のこと。中でも特に、十八歳未満の人をヤングケアラーという。私もその中の一人である。私の妹は障がいを持っている人のこと。中でも彼女の世話をしている。普段の見守りや、入浴の介助などは毎日のことだ。それでも、そのことを負担に思つたことはなかった。そのために時間をとられることは、ほとんどなかつたからである。

しかし、ヤングケアラーの中には多くの人のように生活できない人もいる。文部科学省によると、ヤングケアラーは自由な時間を持てず、学校に関しても欠席や授業中の居眠り、提出物ができるいないことが増加する傾向にある。これは、介護により学習時間や睡眠時間など、自分のための時間が減るからだろう。私はこの事実を知つて驚いた。他の事をする時間もなくなるほど、介護に時間を割いている子供がいるとは、全く思つていなかつたからだ。そして、同時に心配になつた。子供の期間は多くの将来のための期間なのだ。そのため、学校

や私生活の中で時間を持てないことは、大きなダメージを与えるのではないだろうか。

では、どうしたらそうなることを防げるのか。私は、周りの人人がヤングケアラーという概念を知り、その存在を認知することが必要だと思う。彼らがどんな負担を強いられ、何を求めているか。自分の身近に存在しているかどうか。これらを知つていれば、必要だとと思う。

学校や家庭での生活の支援も可能になるからだ。しかし、現在のヤングケアラーの認知度は、一般国民の約23%と低い状況にある。私も、自身がヤングケアラーであり、周囲よりも関心を持ちやすいにも関わらず、聞かれたことがなかつたことで、その認知度の低さを痛感している。それでも、近年は注目されるようになり、テレビや新聞で目に見える機会も多くなつてきている。一人のヤングケアラーとしてうれしいし、そのような風潮が広がつていてくれればと思う。

しかしながら、介護による負担を強いるのは、ヤングケアラーだけではない。十八歳以上のケアラーも、介護の時間を確保しなければならないということは、仕事をするにあたつて不利になる。統計データなし。これが、現在の日本のヤングケアラー、ケアラーの数であり、この問題に対する現状である。海外では、イギリスなどでは公的なデータが発表され、対策も進んでいる。この違いは、やはり国民の意識の違いによるのではないだろうか。私達が関心を持てば、少しづつ現状は変わるだろう。いや、変えていかなければならぬ。まだ未知数の人の

や私生活の中で時間を持てないことは、大きなダメージを与えるのではないだろうか。では、どうしたらそうなることを防げるのか。私は、周りの人人がヤングケアラーという概念を知り、その存在を認知することが必要だと思う。彼らがどんな負担を強いられ、何を求めているか。自分の身近に存在しているかどうか。これらを知つていれば、必要だとと思う。彼らがどんな負担を強いられ、何を求めているか。自分の身近に存在しているかどうか。これらを知つていれば、必要だとと思う。彼らがどんな負担を強いられ、何を求めているか。自分の身近に存在しているかどうか。これらを知つていれば、必要だとと思う。

私は、この存在はケアラーにとってうれしいことだと思ふ。また、条例に基づき、相談所が設けられている地域もある。私は、この存在はケアラーにとってうれしいことだと思う。法律によつて明確に方針が定まるところは、一般の人でも何に気を付ければいいか分かりやすくなることを示し、ケアラーに適切な対応を取れるようになる。相談所も、自分の悩みを相談し、解決することができる。しかし、この二つの存在があるのは、ごく僅かな地域だ。他の地域でも設けるためには、相談所開設などの意見を述べたり、条例を受け入れたりしやすい風潮にする必要だ。そのために、やはり、周りの人がケアラーについて知るところから始めなければならぬと、私は思う。待つてはいるだけでは、駄目なのだ。

統計データなし。これが、現在の日本のヤングケアラー、ケアラーの数であり、この問題に対する現状である。海外では、イギリスなどでは公的なデータが発表され、対策も進んでいる。この違いは、やはり国民の意識の違いによるのではないだろうか。私達が関心を持てば、少しづつ現状は変わるだろう。いや、変えていかなければならぬ。まだ未知数の人の